

森鷗外「山椒大夫」私記

——運命を変える知恵——

辻 憲 男

A Note on *Sansyoudayuu : Ougai Mori — Wisdom changes fate —*

Norio TSUJI

【要 旨】森鷗外の小説「山椒大夫」（一九一五年）の読解と考注。論述の主題は、安寿の運命および作者の運命観であるが、母親や厨子王らの運命と併せて、とくに作者の依拠した説経「さんせう大夫」の運命観とも対比しつつ、作品創造の基底を考察した。幼い姉弟は初め運命に抗う術を知らなかったが、やがて、弟だけを逃がすという姉の知恵が運命を変える。説経の主題は姉弟を守護する地藏菩薩の靈験であった。対して近代小説の人間（人格）は、主體的な意志と知恵を持って未来の希望を切り開く。加えて、作者の言う「歴史離れ」の一面を検証し、私見を述べた。

【キーワード】森鷗外、「山椒大夫」、「歴史其儘と歴史離れ」、説経「さんせう大夫」、安寿、厨子王、運命、地藏の靈験

はじめに

運命という言葉をふと口にし、あるいは運命について語るといふことを、今の人はしなくなった。かつては何か偶然とも思われるような、恐ろしい不可避の力が人の世を支配した。前近代はそれを「宿世」とも「定め」とも呼んで信じた。生老病死の、生活や生命を脅かす何物かに対してお弱く無力であった。知恵ある者、信ある者が不幸災厄に立ち向かう勇氣を持った。しかしそれをした結果もまた運命に従うほかはなく、あとは天意や神仏に委ねた。時に成就を占い、祈誓や請願を頼みとした。

森鷗外の歴史小説「山椒大夫」(一九一五年)。事の始まりは父正氏の十二年前の筑紫流謫である。二人の子供の成長を待って、母子は岩代を旅立った。ところが越後で人買いに騙され、安寿と厨子王は丹後の山椒大夫に売られた。やがて姉は弟だけを逃がして死んだ。清水寺で厨子王は関白師実にそう話した。懐の守本尊が幸運を呼び込んだ。だが十三歳の厨子王は周囲に助けられただけで、自らは何も行動していない。貴種の福運とは言え、還俗した後すぐに元服し、父の赦免、丹後国守遥任へと話が進む。それより前、十五歳の安寿の入水は僅かに沼の端の藁履の暗示があり、早くに国分寺の者がそれを聞いて来たところ。以下は姉の死を厨子王が悲しんだとも書かず、後の弔いと尼寺建立を言うのみである。自解「歴史其儘と歴史離れ」(一九一五年)も安寿に触れるところはほとんどない。……そして厨子王ひとりが母とめぐり逢い幸福である。潔く「犠牲」になった安寿は、はたしてこの小説のなかで救われているのだろうか。

小説の最後、佐渡へ渡った厨子王は地蔵の靈験を見る。心中に、「若し役人なんぞに任せて調べさせて、自分が捜し歩かぬのを神仏が逢はせて下さらないのではあるまいか」などと思った、とある。まだ少年の心である。それがようやく自ら行動する成年になった、と作者が啓示したごとくである。依拠本においても、筑紫への旅は自分が願ったことであつたのに、柔弱な少年はおのずと挫けそうになることがあつた。

運命を変える知恵

厨子王は小説の主人公たる資格を与えられていない。真の主人公はもとより安寿であり、この少女こそが本作の主題を担う人物である。安寿の造型は前々年の「護持院原の敵討」のりよや、前年の「安井夫人」の佐代から引き継ぎ、より内面化して、あとの「最後の一句」のいちや、また「高瀬舟」の喜助へとつながる、明晰な意志的人格であると見ることが出来る。小説の書き出しの一文に、

姉娘は足を引き摩るやうにして歩いてゐるが、それでも気が勝つてゐて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折々思ひ出したやうに弾力のある歩附あるきづきをして見せる。

とあり、作者もそのような堅固な性格を与えたらしく思われる。その人格が即ち「運命」にいかに向き合ったか、極論すれば作者はそれよりほかのことは書かなかつたのではないか。

山椒大夫のところへ来てからも、姉弟は名を言わず、死んでも別の小屋に別れぬと抵抗した。当初はただ怯え、大人のように絶望もせず、誰を恨む様子も見せなかつた。「朝餉を食べながら、もうかうした身の上になつては、運命もつとの下に項を屈めるより外はないと、けなげにも相談した」。「運命」に抗う意思はまだ萌していない。しかしやがて姉は明晰周到に、第一人を逃がすという捨て身の反抗を計画する。作者は前もって、運命に関して越後国の掟に触れて、人買ひとかひが立ち廻るなら、其人買の詮議をしたら好きさうなものである。旅人に足を留めさせまいとして、行き暮れたものを路頭に迷はせるやうな掟を、国守はなぜ定めたものか。不束な世話の焼きやうである。併し昔の人の目には掟はどこまでも掟である。子供等の母は只さう云ふ掟のある土地に來合せた運命を歎くだけで、掟の善悪よしあしは思はない。

と書いた。詳細なのはここが重大な分岐点だからである。子を思う故に母は蹟いた。しかし時と場と人の偶然が生死を分ける。⁽³⁾作者の運命観はかく非情である。説経の「運命」も然り。そのことは、あとの節で佐渡七太夫正本に注目

して再説しよう。

今は「人」について言うならば、世疎い善柔な母である。細部であるが、潮汲女に対して初め気遠い様子で、長く「一人離れて立つて、此話を聞いてゐたが、」とある。女の善意に安心し、その隙を人買いに突かれる。世慣れた女中が外に出ていたのも不運であった。依拠本には潮汲女が短く「かたりすてゝぞ」通りける、とある。作者はそのような気遠さ（素気無さ）^{すげな}を反転し、母の上臆らしい気遠さ（よそよそしさ）を創作したのであろうか。

運命に流されて嘆く哀れな女の一人は「最後の一句」（一九一五年）の母親である。十六歳の主人公や平野町のおばあ様を際立たせるためもあるが、厄難に遭って二年程の間、悔恨と悲痛、繰り言と溜息ばかりで泣き呆け、夫の運命（斬罪）を知った時も同じであったとある。また「護持院原の敵討」（一九一三年）の宇平のように、苦難に耐えきれず意気地なく逃亡する男もいた。悲運に手を拱くのでなく、願わくは運命を変えて逆に幸福をつかみ取りたい。作者のそうした思いの見事な実例は、たとえば安井夫人・佐代であったのではないか。^③

安寿は早々に聡く賢しく覺つて厨子王に話した。

「大きくなつてからでなくては、遠い旅が出来ないと云ふのは、それは当り前の事よ。わたし達はその出来ない事がしたいのだわ。だがわたし好く思つて見ると、どうしても二人一しよにこゝを逃げ出しては駄目なの。わたしには構はないで、お前一人で逃げなくては。そして先へ筑紫の方へ往つて、お父う様にお目に掛かつて、どうしたら好いか伺ふのだね。それから佐渡へお母様のお迎に往くが好いわ。」

「出来ない事がしたい」、運命を希望に変えたい。それを可能にするには知恵を用いることだ。^④神仏を頼みにするのではない、安寿が仏の知恵（地蔵の守護）を確信したのは、二人同時に悪夢を見、醒めて守本尊の額の疵を見た時からである。知恵が希望を生む。

安寿自身は「運命」とは言わず、「運」の語を使っている。

お母あ様と御一しよに岩代を出てから、わたし共は恐ろしい人にばかり出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢はぬにも限りません。

さあ、それが運^{うんだめ}験しだよ。開ける運なら坊さんがお前を隠してくれませう。

姉はここで地藏尊とともに守護霊になると解されるのだが、言うまでもなく、靈験譚ならぬ近代小説の主体は人間（人格）でなければならぬ。「運命」が宿運や寿命に近い語とすれば、「運」は現実の幸不幸のめぐり合わせを言^⑤う。そのとおり、律師と師実にめぐり逢つた。「運」を開いたのは、弟だけを逃がすという知恵である。母の負つた運命をそうして希望に変える。厨子王が何もしないのは、かえって安寿独りの怜悯な決行を際立たせる。危機を救つたのは守本尊でも皮籠でもなく、高德の律師と豪胆な鐘樓守とである。小説の主役はまさに人間の知恵と力である。

説経「さんせう太夫」の地藏靈験

依拠本の説経「さんせう太夫」では、国分寺のお聖が皮籠の中に童^{わっぱ}を匿^{かく}つた——寺をめざせと教えられ、やむなく駆け込んだ寺の僧である。これ以後の話はすべて、地藏菩薩の利益靈験を主題に据える。

先に、姉の守本尊が「兄弟が身の上に、しぜん大事の有時は、必身がはりに立給ふ」と母は教えた。山道で二人が手を合わせ、「やきがねを何とてのがし給はぬ」と恨みかこち泣くと、忽ち跡形もなく「げに有々と取給ふ」。安寿が厨子王に、すぐに落ちよと強請するのはこの直後である。落ちぬなら姉弟の縁を切る。衝動的とも無謀とも思われるが、この激しい直情が安寿を陰の主人公たらしめる。尤も近代人的な個性というのでなく、弟を出世させる守護霊になるという意味である。

対して厨子王はまだ幼く、己が運命を覺らず自立しない童である（注1）。依拠本では、皮籠の奇跡が地藏の靈験であることにも気づかない。身軽く皮籠に入り、聖に背負われて京に上る。童兒ゆえに地藏が守護し、開運出世を導

く。朱雀野の権現堂に来て、聖は教訓した、「いかに若君、此御どうと申は、いにしへもさの弓取の、御うんをひらかせ給ふ也、御よに出させ給ふべし」。「猛者^{もさ}の弓取」は源為朝（一二三八～一二七〇？年）。朱雀野は保元元年（一一五六）の父為義の旧跡だからである。若君は聖を「命のおや」と頼り、なおも形見に地藏や守り刀までを与えようとする。父性を欠く柔弱な子供である。「おろか也若君、こんどの一めいぐそうがわざならず、此より佛身がはりに立給ふ、よきにしんじてかけ給へ」と聖は去る。独力で運を開け。姉の言い置きが現実になる。小説の作者も、「亡くなつた姉と同じ事を言ふ坊様だと、厨子王は思つた」と書いた。

このような教訓や「運」の語の见えないテキストもある。横山重編『説経正本集 第一』（一九六八年）に収める五種の本に就いて、右の傍線部に該当する文段を書き抜く。

一 さんせう太夫（天下一説経与七郎正本） 天理図書館蔵 〔複製『天理図書館善本叢書 古浄瑠璃続集』（一九七九年）所収〕

〔コノ前ニ形見ノ事アリ〕 さてこんとのいのちをは、此ひじりがたすけたとおほしめさるゝか、はだのまふり
のぢそうほさつの、おたすけあつて御さあるぞ、よきにしんじておかけあれ、

二 せつきやうさんせう太夫（天下一説経佐渡七太夫正本） 天理図書館蔵 〔複製、右に同じ。同板の安田文庫蔵本の複製を『新編稀書複製会叢書 第十五卷』（一九九〇年）に収める〕

〔権現堂ニテノ聖ト若君トノ對話ヲ欠ク〕

三 さんせう太夫（寛文七年山本九兵衛板） 大東急記念文庫蔵 〔一六六七 years〕

いかに若君。此みたうと申は。いにしへもさる弓取の。ごうんをひらかせ給ふ也。御身も都にて。いか成人をもたつきとし。御よに出させ給ふべし。〔コノ間ニ形見ノ事アリ〕今ど一めいまつたぐそうがはざならず。忝も此お佛、かわごの内より。こんじきのひかりをはなち。みがはりに立給ふ。よきにしんじてかけ給へ。

四 山庄太輔 題簽さんせう太夫（佐渡七太夫豊孝正本）

いかにおさない、是はみやこにかくれなき。七條しゆしやか、こんけん堂。にて候そ。よきにしんじんしたまひ、みよにいてさせ給ふべし。〔コノ間ニ形見ノ事アリ〕 あらもつたいなや、忝もぢざうほさつは。こんしきのひかりをはなち。三郎がまなこに、きりふりかゝり。さて。こそ、命はめてたきぞ、よきにしんしん取給へ。

附録一 さんせう太夫物語（寛文中末期草子型江戸板）

〔コノ前ニ形見ノ事アリ〕 さてもこんどの、いのちをば。ひじりがたすけたると、おぼしめさるゝか。はだのまほりの、ちざうぼさつの、おたすけなされ、候ぞや。よきに、しんじて、かけ給へ。

こうして見ると、依拠本に最も近いのは三の寛文七年（一六六七）「山本九兵衛板」である。「あらいたわしや」若君の開運は、天王寺までの長い迂回を要する。小説は依拠本に従ってこれを探らず、直ちに清水寺まで行つて籠る。権現堂で別れた理由は触れない。朱雀野が京の丹波口であるだけでなく、運命転換の機縁を得られる旧跡であつたからである。小説の時代設定があつた故にその一点を脱落させることになつたと考えられる（後述）。

佐渡七太夫正本の「運命」

前節の説経正本の二「佐渡七太夫正本」のなかに、無気味で恐ろしい「運命」の一語があらわれる。同様の文言は最古の一「与七郎正本」にもあつたと思われるが、当該本文の前後二丁を落丁し、確認ができない（後述）。話は廻り、直江で山岡太夫に謀^{たばか}られて四人が家に向かうところである。

太夫此由承、おやとを参らすまいと思共、あまりに御いのちかければ、さらはおやとまいらせん、ろしにて人にあふたり共、太夫に斗物いはせ、おしのひあれと申、太夫かやとへ御共有、上らう様のうんめいつくれは、ろしにて人にあいもせず、太夫かやとにお付有、

口止めもさりながら、路次にて誰一人行き遇わなかった。そのような偶然が起こったのは、上臈様（母）の運命が尽きたからなのだ。単に不運と言わず、個に定まる暗黒の力が厄難を招いたのだ。天も人も彼らを見放した、顛落の道行きをかく言うのである。この部分、右の三「寛文七年山本九兵衛板」には路次の事が無く、あとの太夫の夜物語の、いかに上らうさま。ちかき比にも。都へ御上りかと申。みだいうんめいつきぬれは。今がはしめと仰ける。今がはしめの事ならは。心やすしとうちうなつき。

の間に答えた、その一言が運の尽きであったことを言う。偶然の要素はない。その他、四「佐渡七太夫豊孝正本」は運命に言及したところがない。また附録一「寛文中末期草子型江戸板」は上巻一卷を欠く。最近の新日本古典文学大系『古浄瑠璃 説経集』の本文は、

太夫此由うけ給り。「御宿を参らすまいと思へ共。余りに御意の近ければ。さらば御宿を参らする。路次にて人に会ふたり共。太夫に計物を言はせて。静かに忍びあつて給れ」と。太夫の宿へ御供ある。／是は太夫の符のよかりたる物語。上臈様の運命尽くれば。路次にて人に会ひもせず。太夫の家路にお着きある。〔コノ間ニ女

房ノ事アリ。以下、太夫ノ夜物語〕 京へ御上り候は。今が初か」と問ひければ。運命尽きたる上臈様の。「今を初」とお語りある。

とある。底本（与七郎正本）の欠を新出の「さんせう太夫物語」上巻で補った部分に当たる。母の運命の消尽を二度強調する。太夫の「符」は同書脚注に、運、めぐりあわせ（日葡辞書）とある。太夫の悪運が強く、世に「善は弱く。悪は強ひものの事なれば」と語るのは残酷と評すべきか。

さて小説の依拠本（徳川文藝類聚）は、ここに路次の事は無く、短く「四人ともない我やにかへり」とある。舟路を誘うところにも「運命」の語は出ない。

作者が先に掟や運命に言及したのは（既述）、そこが展開上も重大な岐路となるからである。説経は母の運命を憐

れみ、その上でなお太夫の「うば」（女房）の善心を挿入するのだが、時既に遅く、母の運命は尽きている。小説は憐れみを書かず、す早く次節の早朝の湊へと筆を運ぶ。運命の舟出までの短い間に昨夜の物語を入れる。

室町期に「運命尽きぬれば知恵の鏡も曇る」の言い回しがあった如く、母は知恵を失った。小説は再三、姥竹の不安の気色に注意するが、それもはや母の曇り鏡を拭う力を持たなかった。

歴史離れと伝説離れ

「歴史其儘と歴史離れ」によると、「歴史離れがしたさに」書いたのだが、それがし足りないようである、という。「時代を蔑ないがしろにしたくない所から」、梅津院に関白師実を当て、年立を永保元年から寛治六、七年の間（一〇八一〜一〇九二、三）に経過させたことである。仙洞院政の開始期である。師実は京極殿、著名な歌人（一〇四二〜一一〇一年）。寛治四年（一〇九〇）に二度目の関白になった。養女賢子は白河上皇の後、堀河天皇の母。依拠本に申し子祈願の参籠とあったのを、小説では「娘の病気の平癒」に改変した。師実は五十歳前後の「老人」であったことになる。

梅津院は依拠本に「七じゆんに及迄御子ひとりもあらざれば」とあり、たしかに実在の関白基実と合わない。基実は梅津大臣、近衛家の祖。保元三年（一一五八）十六歳で関白になり、二十四歳で没した（一一四三〜一一六六年）。子は六人あった。参考までに記せば、基実は関白忠通四十七歳の時の待望の嫡男である。保元の乱ではともに後白河方につき、崇徳院方の忠実・頼長父子に勝利した。崇徳院方の為義・為朝父子も奮戦したが、為義は朱雀野で斬られ、為朝は伊豆大島に流された。説経の仮設の時代はこのような動乱期以後と見るのが適當ではなからうか。

一方、小説では正氏を平将門の裔とせず、単に高見王の流れの桓武平氏の族とした。将門の乱は師実の時代からすればそう遠い昔でもない（九四〇年）。陸奥掾正氏の流謫後、母子は岩代の信夫郡にあった（作中三例）。

依拠本等に「奥州五十四ぐんのあるじをば、岩城の判官正うち殿とぞ申ける」とある。正本の表記は「いわき」で

あり、「いわきの判官」は、中世磐城地方を領した岩城氏一族のことである。同じく桓武平氏として常陸の国香の裔を称したので、将門伝説との混交を生じたのであろうか。説経の仮設の人物は中世の武士団の一人である。

右を結論的に言えば、院政最初期という時代設定はやや早すぎるようである。併せて気にかかるのは厨子王―正道の年齢である。作者も「稍妥当でなく感ぜられる事」は「十三歳の国守」であると書く。説経がそこに迂遠な蘇生譚を挿むのは、この間の厨子王の復活成年を無理なく語りたいがためである。小栗やしんとく丸同様の再生出世があって、山椒大夫らへの容赦なき誅罰が遂げられる。怨嗟復讐の背景に、平安末期から戦国時代に及ぶ中世民衆社会がある。対して小説の時代設定は、いわば律師や関白の権威権力がいまだ強く保たれた平安貴族社会である。遥授の国守であれば、実際は関白らが差配して国法を定めればよい。厨子王が最後まで少年のごとく溫柔な貴公子然であるのはむしろそれにふさわしい。

さらに一つ、確認しておきたい背景は地藏信仰である。小説には百済渡来金の像を高見王が持仏としたとある。百済は早く滅亡し（六六〇年）、高見王も実在が疑われる。ただ伝世品であれば仏教史上の伝承として矛盾はない。しかし六地藏の信仰は平安中後期まで下り、現存最古の実例は中尊寺金色堂（一一二四年建立）の尊像であるという（松島健『日本の美術』No.239 地藏菩薩像 一九八六年）。しかも名字は異称・異説が多く、放光王地藏もその一尊（一身）であり、たとえば『古事類苑』の「地藏菩薩」の項に、「仏像図彙」を録した中に、

放光王地藏 〔左手ニ錫杖ヲ持チ、右手ニ与願師雨ヲフラシ、五穀成就セシメ玉フ、〕

とある（宗教部第一冊九八頁、一九一〇年初版。「与願師」は「与願印」の誤り）。『仏像図彙』の典拠は『仏説地藏菩薩発心因縁十王經』である。ところがこの『十王經』は日本で撰述された偽經であり、一説に「十三世紀なかごろに偽作された」とする。⁸⁾ たしかに「放光王地藏」は玄奘訳『十輪經』等の地藏經典には見えず、大藏經データベースにおいても、同一の文字列は検出することができない。ともあれ師実の時代はそれよりも早く、この条は作者の創作

であると見るほかはない。

*

小説から数年後、鷗外はこの話を含む子供向けの読み物の編集にかかわった。森林太郎・松村武雄・鈴木三重吉・馬淵冷佑 同撰「標準お伽文庫」六巻の、これは「山椒大夫」を収める『日本伝説下巻』（一九二一年）である。各巻各篇の著作者名は明記していないが、少なくともこの一篇は鷗外以外の人は考えられない。以下、その加除改変（鷗外自身の手によるとは限らない）に注目して、上述した「運命」その他の点について補足しておきたい。

小説の「山椒大夫」は十四の文段に、この「伝説」は十三節に分けられている。小説の第八、第九の二つが伝説では合わせて一節になっているが、全体の構成はほぼ同じである。「小説の第八は「姉は潮を汲み、」から、第九は「二人の子供が」から始まる文段」

「運命」に関する言及は、次の安寿の言葉にのみあらわれる（ルビを略す）。

a おかあさまと一しょに岩代を出てから、わたしどもは恐ろしい人にばかり出あいましたね。でもそのうちいい人に出あわないともかぎりません。

b さあ、そこが運だめしです。運が開けるようだったら、坊さんがきつとかくしてくれます。

a の文には、小説にあった「人の運が開けるものなら、」の句がない（前掲）。b の文でも繰り返すので削除したのであろう。しかし母に関係するところでは、潮汲女や山岡大夫との応答などに、小説に劣らぬほど精細な叙述がある。運命とは言わず、おのずからに遭った厄難であることを強く印象づけるためである。第一節に、「女中が潮汲女に声をかけて」、「そしてこんな問答がはじまりました」とある。その間、潮汲女が、

「このへんには人買がいますので、旅人が足を止めないように、お上から宿をすることをお差し止めになりまし

た。」

とも教えたのだが、問答が済んでから、

おかあさんは潮汲女のそばへよって、／「これはいいお方にお目にかかりました。それではそこへ行つて休ましよう。どうかわらやこもをお願いします、子供に風をひかせないようにしてやりとうございますから。」／と
いいました。

とある。人買の話聞き流したのか。第二節に、芋粥の誘惑に乗り、

おかあさんは子供たちにあたたかいお粥が食べさせたいので、山岡大夫にとまらせてもらうことにしました。
とあるのも、子を思ふ心の闇に迷ったごとくである。子供らはいかにも穉く弱々しい。丹後まで買い手がつか
なかつたのも、「二人が小さくって、からだが弱く見える」からであつた。山椒大夫も一目見て、

「それでは姉は浜へ行つて、毎日三荷の潮を汲め。弟は山へ行つて、毎日三ばの柴を刈れ。力がないうだから、
荷はかるくしてやる。」

と言つた。傍線部は、小説では「弱々しい体に免じて、」とある。小説の用字「穉」（二例）は、おくての稲の意。年
齡のわりに成長が遅れているというのである。

しかし「弱」は字義どおり「若」に通じる。弱いことは、若く強い生命を蔵することである。負の「運命」を希望
に変えるのは少女の知恵の働きがある故であり、弟を守護する姉の若い生命が与つた故である。小説では「女は早く
おとなびて、その上物に憑かれたやうに、聡く賢さかしくなつてゐるので、」と説明された。伝説では「厨子王はねえさ
んが大そうえらくなつたやうに思われて、」と言つたとどまる。

安寿の死の積極的な意味は、厨子王を生かすための「身代わり」の企図であつたことである。しかし子供が死なね
ばならぬのは、親の不幸な運命を引きずつたからである。それは父の代わりのいちの「マルチリウム」（献身）と同

じ、極限状況における決死行である。また反面、それは高瀬舟の上の喜助の晴れやかな「額」にも通じる心である。安寿は実に、その日の朝も、「毫光のさすやうな喜を額に湛へて」いた。最期は、伝説では「安寿は厨子王を見おくたあとで、沼にとびこんで死んだのでした。」の一文のみを付加する。

安寿の自死をしも、満ち足りた「家族愛」の形と言うのだろうか。共に生きてこそ家族愛がある。安寿のヒロイックな死は幸福であつたのかどうか、何がしかの疑問が残る。「幸福は人格である。」——私の脳裡から去らぬのは、その三木清の『人生論ノート』（一九四一年）の次の言葉である（「幸福について」）。奈何。

愛するもののために死んだ故に彼等は幸福であつたのではなく、反対に、彼等は幸福であつた故に愛するものために死ぬる力を有したのである。

彼の幸福は彼の生命と同じやうに彼自身と一つのものである。この幸福をもつて彼はあらゆる困難と闘ふのである。幸福を武器として闘ふ者のみが斃れてもなほ幸福である。

注

(1) 父の死を知った厨子王（正道）は「身の褻れる程歎いた」とあり、姉に対するのと大きく異なる。作者の依拠した説経本には、お聖があとを弔ったと聞いて「共にきへんとなき給ふ」とある（徳川文藝類聚 浄瑠璃 一九一四年。底本は寛永本の享保複刻本、六段形式。他の説経正本では一字建立を金焼地蔵の由来とする）。なお本稿の引用の多くは、『鷗外歴史文学集』第三卷（一九九九年）に拠った。他の作品と併せ、上引の参考資料等を収録する。

(2) 旅人を泊めない国で日が暮れたという偶然を言う。およそ偶然と運命、運命と人生などは、近代の文学・思想の大命題である。参考までに、次に三木清『人生論ノート』（一九四一年の「希望について」の一節を引く）。

人生においては何事も偶然である。しかしまた人生においては何事も必然である。このやうな人生を我々は運命と称してゐる。もし一切が必然であるなら運命といふものは考へられないであらう。だがもし一切が偶然であるなら運命といふものはまた考へられないであらう。偶然のものが必然の、必然のものが偶然の意味をもつてゐる故に、人生は運命なのである。／

希望は運命の如きものである。それはいはば運命といふものの符号を逆にしたものである。もし一切が必然であるなら希望といふものはあり得ないであらう。しかし一切が偶然であるなら希望といふものはまたあり得ないであらう。／＼人生は運命であるやうに、人生は希望である。運命的な存在である人間にとつて生きてゐることは希望を持つてゐることである。

- (3) 十六歳の佐代は自らの未来を意志的に選び取った。作者は早く、講説「マアテルリンクの脚本」(一九〇三年)において、「運命」といふものは、一応避くべからざる秘密なもののやうに見えるけれども、明智の人は其運命を自分で左右して、さうして幸福に達すると云ふのが、マアテルリンクの議論でございます。」云々と述べている(『鷗外全集』第二十五卷)。なおメーテルリンクの脚本「モンナ・ワンナ」等については、金子幸代『鷗外と近代劇』(二〇一一年)から多大の教示を得た。
- (4) 「最後の一句」のいちの独言「ああ、さうしよう。きつと出来るわ」に通じる。窮して項を屈めるのではなく、父の代わりに「わたくし共子供を殺して下さいと云つて頼む。いちには絶望は無い。安寿のような信心も無いが、おそらく、子供の命を取つて親の罪を赦すという道理はないとの希望を持ったのに違ひない。人情からしても、けなげで堅固な孝心が大人の心をうたないはずはない。不成功の恐れはある、刑は決まった、己の罪は己が引き受けよ、と一蹴されるかもしれない。妹に「そんなら、お父つさんが助けてもらひたくないの。」と迫つたのも不安の表れである。作者によれば、知恵とは「献身の中に潜む反抗」である。

- (5) 大槻文彦『言海』(一九〇四年)には、「運命」は「運トイフニ同ジ」とし、「運」は「人ノ身ニ運リテ来ル善惡ノ象^{サガ}。天命ノマハリアハセ」とある。なお幸田露伴の歴史小説「運命」は一九一九年の作。

- (6) 現行のテキストとして、平凡社東洋文庫『説経節』荒木繁・山本吉左右(一九七三年)、日本古典集成『説経集』室木弥太郎(一九七七年)、新日本古典文学大系『古浄瑠璃説経集』信多純一・阪口弘之(一九九九年)などがある。

- (7) 岩代は通称である。『大日本地名辞書』(一九〇六年)にも「岩代国」を立項するが、「岩代の文字、古書に見えせず」とある。『延喜式』『和名抄』には信夫郡は陸奥国に属し、「岩代」「磐城」の国名は見えない。歴史地名として、養老年間の石城^{いはき}国、石背国、および明治初年の磐城国、岩代国がある。なお正氏、将門に関して、和辻哲郎『日本芸術史研究 歌舞伎と操り浄瑠璃』(一九五五年)の「山椒大夫」に短い考説がある。

- (8) 速水侑『地藏信仰』(一九七五年)。偽作説の先蹤は、同書によれば本居宣長の『玉勝間』である(十の巻「十王経」)。一方、石田瑞麿『民衆経典』の「解説」には、十王経の成立は「恐らく十一世紀末頃か」とあり、推定年代に大きな開きがある(一九八六年)。版本、絵入り版本や、活字本『大日本統感経』第一輯第二編乙第三套第四冊(一九二二年)、同新纂版第一卷(一九八〇年)がある。石田著に本文と訳注を収めるが、六尊の名字については「不詳」とする。なお付するに、この

方面の最新の研究に、岩谷泰之「森鷗外と仏教―『大日本統藏経』を中心に―」、全国大学国語国文学会「文学・語学」第二二五号（二〇一九年）があり、大変有益である。

（9）

「標準お伽文庫」は『日本童話』『日本伝説』『日本神話』各上巻・下巻、一九二〇～一九二二年。付録の「解説」によると、伝説集の原話は多く謡曲や御伽草子、古浄瑠璃等を参看したようであるが、山椒大夫に関しては佐渡島の異伝を紹介するばかりで、鷗外の小説には触れない。この初版本の現代仮名遣い復刻版として、平凡社東洋文庫『日本お伽集』二冊があり、1「神話上下と伝説上」、2「伝説下と童話上下」に分かつ（一九七二、一九七三年）。復刻版の「解説」（瀬田貞二）に倣い、各篇の頁数を記せば、浦島太郎19、一寸法師23、姨捨山22、羽衣15、金太郎22、松山鏡17（以上1）、玉取り16、山椒大夫39、田原藤太14、物臭太郎20、羅生門14、牛若16（以上2）である（それぞれ挿絵頁を含む）。山椒大夫のみが小説風の長編である。なお松村の回想によれば、各話の文章は馬淵が作り、鷗外らが推敲校閲したものである（瀬田貞二「あとがき付記」）。

（二〇一九年十月十一日）